

死亡および結婚の変化とライフコース人口分布の変動

高橋重郷

1. はじめに

人々の一生を時代的に、また世代的にみた場合、家族形成に関わる年齢過程には時代変化の要素と世代変化の要素の両者を伴っている¹⁾。すなわち、ある世代（出生コウホート、同時出生集団）についてみれば、結婚年齢が若く、しかも多産であり、出産・育児にかかわる比較的長い生活時間を経験している。一方、別の世代では、結婚年齢が高く、少産で、出産・育児にかかわる生活時間が短い²⁾。また、ある世代は別の世代に比較し、離婚や再婚が多く、多様な人生コースをたどっている場合もある。

このように人々のライフコースは、時代的に、また世代的に様々な人生コースがあり、それら人生コースの有り様は、歴史時間的にみれば家族に関する制度的変化と家族形成にかかわる状況的变化によって特徴付けられていると考えられる。すなわち、人々の家族形成行動は、直系家族制から夫婦家族制への家族理念の変化を背景とする結婚・家族規範の変化によって影響を受け、ライフコース変容の要因となる³⁾。また同時に、家族にかかわる状況的变化、すなわち出生数の減少や寿命の延長にともなう人口学的変化の影響を受け、様々なライフコースを生み出すことになると考えられる⁴⁾。家族の形成・発展の諸形態に影響を及ぼす人口学的要因として、たとえば、寿命の伸長は夫婦家族核の生成から消滅までの時間を増大させる効果をもっている⁵⁾。また男女の死亡率格差の拡大化傾向は、夫婦家族核が死別によって解消した後、女性の生存期間を拡大するという影響をもたらす。一方で、出生児数の減少傾向は、長子から末子までの出産間隔を縮小させ、女性の一生における役割時間に影響をもたらしていることが知られている⁶⁾。

このように人々の誕生から結婚を経て家族の形成、発展、解消、そして本人の死亡に至る過程を考えたとき、現代日本の人々がライフコース類型別に見た場合、どのようなライフコースをたどっており、それがどのように変化してきているかを明らかにすることは重要な研究課題である。またとくに、

- 1) 家族形成に関わる世代的なライフコース論については、社会学的な研究としては、Elder, G. H. Jr., *Children of the Great Depression; Social Change in Life Experience*, The University of Chicago Press, 1974. がある。また人口学的研究としては、Uhlenberg, Peter G., "A Study of Cohort Life Cycles: Cohort of Native Born Massachusetts Women, 1830-1920", *Population Studies*, Vol.23 (3), 1969, pp.407-420. がある。これらの研究に見られるように、家族形成の過程において、世代的な要因や時代的な要因によって人々のライフコースが大きく作用されることは明らかである。
- 2) この点については、たとえば、人口問題審議会他編の第2章ならびに第4章に論じられている。人口問題審議会他編、『日本の人口・日本の家族』、東洋経済新報社、1988年。
- 3) 森岡清美、「社会学からの接近」、森岡清美・山根常男編、『家と現代家族』、培風館、1976年。なお、森岡のこの視点を整理し、論述したものとして、正岡寛司、「現代社会と家族」、正岡寛司・望月崇編、『現代家族論』、有斐閣、1988年がある。
- 4) 人口要因が家族ライフコースや家族変動の要因となることについては、Glick, Paul C., "The family cycle", *American Sociological Review*, Vol.12(2), 1947, pp.164-174. や、石原邦雄、「世帯主権からみたライフサイクルと家族変動」、森岡清美編、『現代家族のライフサイクル』、培風館、1977年。の指摘がある。またコウホート分析によってライフコースの類型分布に対する人口学的要因については次の実証的研究がある。渡邊吉利、「日本人女子コウホートの結婚と出産、死亡によるライフコース」、『人口問題研究』、第181号、1987年1月、pp.1-13.
- 5) この点については、高橋重郷、「死亡率の変化とそのライフサイクル変数への影響」、『人口問題研究』、第45巻第1号、1989年4月、pp.19-33.
- 6) たとえば、前掲注2の人口問題審議会他編による指摘がある。

その変化が結婚・家族規範の変化によってどの程度もたらされてきたのか、あるいは出生や死亡変動といった人口学的要因の変化によってどの程度もたらされていたかを明らかにすることは、現在の家族変動を明らかにするうえでも極めて重要であるといえよう。

本稿では、そのような問題意識から、わが国のライフコース変動について、主として家族人口学的立場からその実証的検討を試みる⁷⁾。しかしながら家族を直接的に扱うにはデータの制約やモデルの煩雑性の問題があり、この分析においては、仮設コウホートに基づいて配偶関係別（未婚，有配偶，離別，ならびに死別）にみたライフコース上の地位の変化を類型化し、ライフコース類型別人口分布の時代的な比較によって、ライフコース変動を検討することにしたい。

2. ライフコースの類型とその変動要因

人々の一生を配偶関係を基軸にしてみると、ある人々は出生後、一定期間を経たのち結婚し、ある期間を過ごしてから配偶者を残したまま死亡し、一生を終える。また別の人々は出生後、一定期間を経て結婚し、その後配偶者と死別し、そして自分の死を迎え一生を終える。さらに別の人々は結婚後、離婚を経験したり、再婚を経験し最終的に自分の死を迎える。一方、ある人は生まれた後、一生を未婚のまま過ごし、自分の死を迎える。

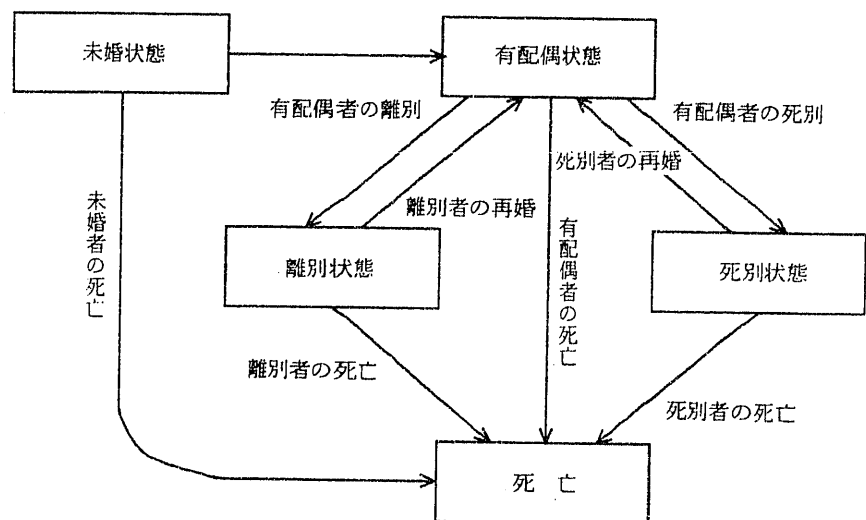
人々の一生を図式的に示したものが図1で、生まれたばかりの人々が、配偶関係上の地位（未婚状態，有配偶状態，離別状態ならびに死別状態）の上で年齢の経過とともに、初婚，死別，離別，再婚，死亡という人生上の出来事（イベント）によって、未婚状態，有配偶状態，離別状態，死別状態という結婚の状態間を、一方向に、また相互に移り変わりながら、最終的に死亡によって人生を終える過程を示している。

さてライフコース類型は、一生の間に経験し得る複雑な配偶関係状態間移動の経歴を、いくつかの代表的なライフコースパターンとして類型化したものである。それによって、特定の時点におけるライフコース類型別の人口数を数え上げることにより、時代や世代に固有なライフコースパターンを明らかにすることができる。

そして、「初婚」，「再婚」，ならびに「離別」といった社会規範的な行動の変化と「死別」や「死亡」といった極めて人口学的な要因の変化によってもたらされる人々のライフコースの変化を計量的にとらえることが可能となる。

すでに述べた配偶関係を軸にして人生コースを考えた場合、人々が一生の間にたどる配偶関係別状態間移動の経路を、次の四つの代表的なライフコース類型に

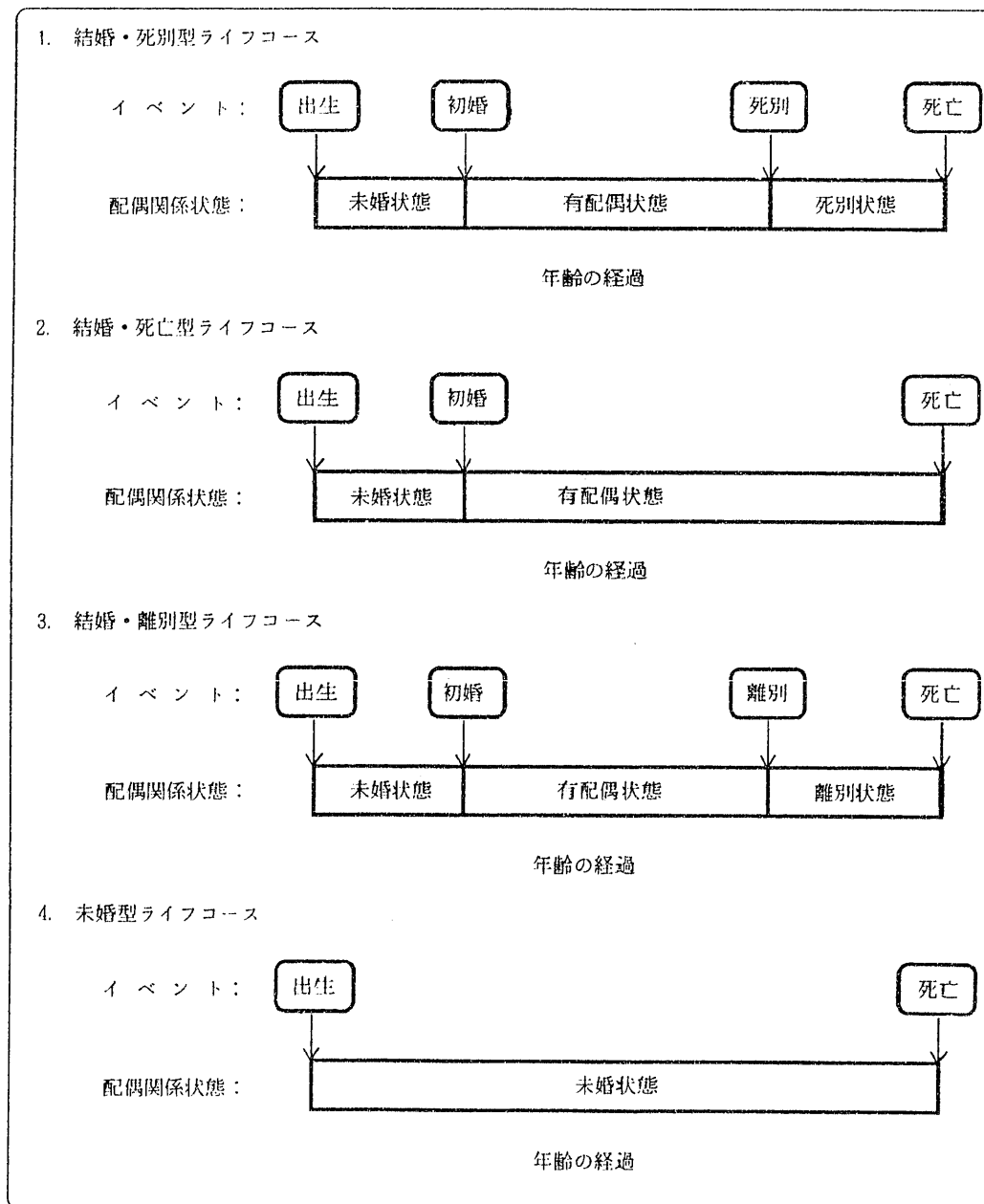
図1. 結婚の状態間移動の概念図



7) 家族人口学的なライフコース分析については、河野稠果，「家族人口学の展望」、『人口問題研究』，第170号，1984年4月，pp.1-17を参照されたい。またその方法論については Bongaarts(eds.)，*Family Demography: methods and their applications*，Oxford University Press，1987. がある。

まとめることが可能である（図2参照）。すなわち、第一のタイプとして、出生から初婚によって結婚し、その後配偶者と死別し、最後に本人の死亡によって人生を終える「結婚・死別型」ライフコース、第二のタイプとして、出生から初婚によって結婚し、その後本人の死亡によって人生を終える「結婚・死亡型」ライフコース、第三のタイプとして、出生から初婚によって結婚し、その後離婚によって結婚を解消し、本人死亡によって一生を終える「結婚・離別型」ライフコース、ならびに第四のタイプとして、出生から未婚状態のまま本人死亡によって一生を終える「未婚・死亡型」ライフコースである。なお、離別・再婚をたどる複雑なコースを考慮することができるが、ここでは類型が複雑になるのを避けるために、ライフコースの定義には死亡の直前の配偶状態という意味でとらえ、「離婚の後再婚し、そして配偶者と死別した後、本人死亡により人生を終える」といった複雑なライフコースの場合は、「結婚・死別型」ライフコースに含めて考える。

図2. ライフコースの経路に関する概念図



以上のように、配偶関係を基軸にした場合、配偶関係間移動のパターンとして上述の四種類のライフコース類型が考えられ、時代とともに人々がたどるライフコース上の人口分布の比較によって、ライフコース変動を観察することができる。

さて、配偶関係という人々の社会的属性の形式的側面に着目し、一生の間に変化する人々の配偶関係上の地位の変遷を典型的に比較・検討する場合、人々の家族形成上の行動変化を社会的な規範的要因と人口学的要因に分けて考えることができる。ライフコース類型別人口分布の変動要因について考えてみると、その人口分布の時代的変動は人々の結婚形成にかかわる行動の変化による結婚年齢や生涯未婚者割合の変化、さらに家族規範の変化による離婚率・再婚率の変化によって生起すると仮定できる⁸⁾。さらに、ライフコース類型別人口分布の変動は寿命の伸長あるいは年齢別生存率の上昇等の人口学的要因の変化によってもたらされる側面がある。

したがって、ライフコース類型別人口分布は、結婚・家族にかかわる規範的要因の条件と人口学的状況の反映として現れ、配偶関係別状態間の移動を発生させるそれぞれの男女別の年齢別発生頻度（初婚、離婚、再婚、死別、ならびに死亡）がそれらの条件のもとでどのような水準にあるかによって強く作用される。すなわち、皆婚規範が非常につよく、離婚に対する社会的許容度が低い社会あるいは時代にあっては、人々の多くが結婚し、その後本人の死亡か、あるいは配偶者との死別後、本人死亡によって人生を終了する人々の割合が相対的に増加する。一方死亡率が高く、平均寿命の短い社会や時代においては、結婚年齢に達する前に多くの人々が死亡するケースが多く、結果的に未婚死亡が多くあらわれる。また結婚の規範のうち、社会的に形成されている結婚適齢期規範が弱い社会や離婚について寛容な社会においては、離別型や再婚型のライフコースをたどる人々が相対的に多くなる。

このように、いくつかの配偶関係別状態間移動のパターンによって類型化されるライフコースタイプ別の人口分布は、個別の社会集団における死亡水準と結婚形成にかかわる規範の強弱と家族解消にかかわる規範の強弱によって大きく異なることを意味している。

3. 1965～85年の結婚・家族形成の行動的变化と人口学的変化

結婚・家族の規範的变化を行動的側面から具体的にとらえる観察可能な変数として、年齢別初婚率、年齢別再婚率、年齢別離婚率を考えることができる。一方、人々のライフコースを決める重要な人口学的変数として年齢別生存率（いいかえれば年齢別死亡率）や平均寿命がある。家族人口学的な分析モデルによる検討のまえに、ここで検討する1965年から1985年のそれら結婚変数と死亡変数の年次的変化について概観し、それぞれの時

表1 結婚変数と死亡変数の比較、1965年および1985年

人口学的変数	1965年 (1)	1985年 (2)	年次間変化 (2)-(1)
結婚変数			
平均初婚年齢、男子(歳)	27.2	28.2	1.0
平均初婚年齢、女子(歳)	24.5	25.5	1.0
平均初婚年齢男女差(歳)	2.7	2.7	0.0
離婚率 ¹⁾ (%)	3.51	5.46	1.95
再婚率、男子 ²⁾ (%)	61.48	47.84	-13.64
再婚率、女子 ²⁾ (%)	9.57	10.36	0.79
死亡変数			
平均寿命、男子(年)	67.74	74.78	7.04
平均寿命、女子(年)	72.92	80.48	7.56
平均寿命男女差(年)	5.18	5.70	0.52

1) 離婚数/男女平均有配偶人口数

2) 再婚数/離別・死別人口数

8) 結婚・家族の規範的变化と結婚年齢分布や頻度の関係については、United Nations, *First Marriage: Patterns and Differentials*, New York, 1988. に詳しく論じられている。また、平均初婚年齢と社会的ならびに人口学的説明仮説を論じたものとして、小島宏、「晩婚化の傾向/シングルの増加」、家族社会学セミナー編、『家族社会学研究』、第2号、1990年、がある。

間の変化がライフコース類型分布に及ぼす効果について予備的考察をして置くことにしたい。

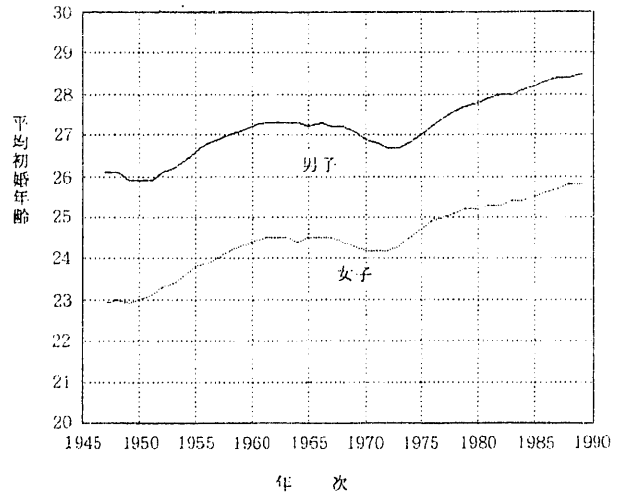
1965年から1985年の結婚変数（男女の初婚年齢、初婚年齢の男女差、離婚率、および再婚率）と死亡変数（男女の平均寿命、および平均寿命の男女差）のそれぞれの変化をみた場合、次のような特徴がみられる（表1ならびに図3～6）。

平均初婚年齢は、1965年に男子27.2歳、女子24.5歳であったが、1972年前後まで僅かに低下した。その後、平均初婚年齢は男女とも毎年上昇を続け、1985年時点で、男子28.2歳、女子25.5歳に達している。一方、男女の平均初婚年齢差についてみると、1965年の2.7歳から1972年の2.5歳をへて、1985年2.7歳へと変化したものの大きな変化はみられていない。阿藤の研究によれば、男女の初婚年齢の上昇には、初婚の年齢分布におけるバラツキ（標準偏差）も大きくなっていると指摘しており、この間の特徴として晩婚化と結婚年齢の幅の広がり特徴となっている⁹⁾。

離婚率についてみると、普通離婚率は1965年の人口1,000人に対して0.79であったが、1985年には1.50と、1965年から1985年の間一貫して上昇している。普通離婚率は、その計算の分母に全人口を用いているので、その数値の動向が必ずしも離婚の趨勢をよくあらわしているとはいえない。そこで、表1の男女平均の有配偶人口を分母にした離婚率によって1965年から1985年の趨勢をみて置きたい。この指標は、一年間に夫婦1,000組から何組の離婚が発生したかをあらわしている。それによれば、1965年では3.5組の離婚がみられたが、1975年に4.3組、1985年には5.5組へと増加してきていることを示している。このように離婚は、趨勢として上昇傾向にあったとみることができよう。

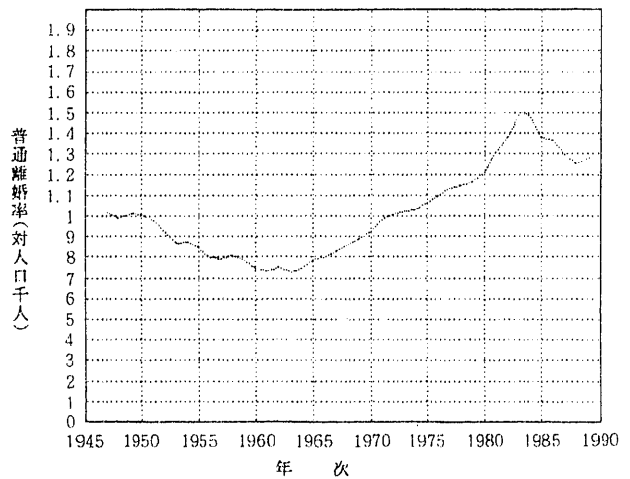
再婚率についてみると、再婚は離別者ならびに死別者から発生するが、一般に普通再婚率は人口1,000人に対する再婚の発生頻度として示される。1965年から1985年の年次変化を追ってみると、1965年の普通再婚率は、男子1.65、女子1.10と男子のそれが女子のそれを大きくうわまわっていた。1985年では、男子1.55、女子1.35と男子の再婚率

図3. 平均初婚年齢の年次推移



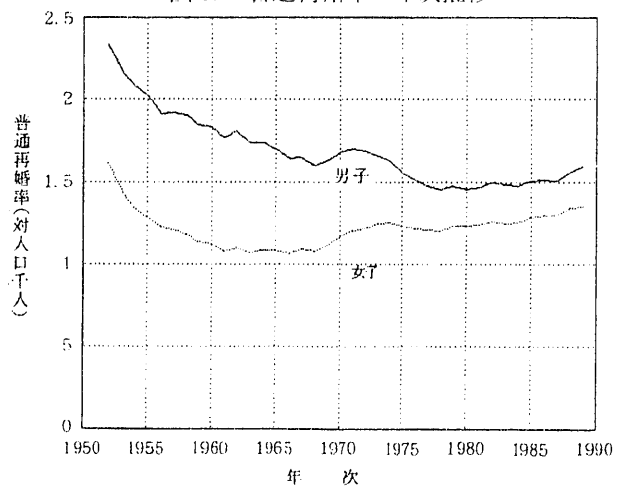
資料：厚生省大臣官房統計情報部「人口動態統計」各年版による。

図4. 普通離婚率の年次推移



資料：前図に同じ

図5. 普通再婚率の年次推移



資料：前図に同じ

9) 阿藤誠、「最近の結婚の動向」、『厚生指標』第38巻第1号、1991年1月、pp.9-15。

は低下し、一方女子の再婚率は増加した。しかしながら、男子と女子ではいぜんとして再婚率に差が存在する。再婚率を発生母集団である離別人口と死別人口を分母にしてみると、再婚率の男女差は一段と拡大する。1965年の男子再婚率は1,000人の離・死別人口に対して61.5、女子再婚率9.6、そして1985年の男子再婚率が47.84、女子が10.36である（表1参照）。

以上の結果からみられるように、男子の再婚率は低下傾向を示し、女子のそれは増加傾向を示している。男女差は、普通再婚率にみられるように男女の水準に差が存在する。しかし、再婚率は離・死別人口を分母にした場合、非常に大きな男女差がみられるように、女子の死別人口の多さがこの指標の男女差を大きくしている。

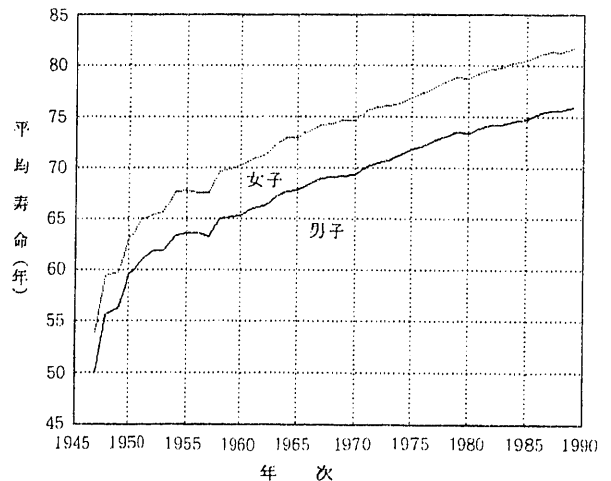
最後に平均寿命の変化についてみておこう。1965年の平均寿命は男子67.74年、女子72.92年であった。その後平均寿命は大幅に増加し、1985年の平均寿命の値は男子74.78年、女子80.48年に達した。この期間、わが国の死亡率にとって順調な低下期にあったことは明らかである。一方平均寿命の男女差についてみると、1965年が5.18年であったが、女子の寿命の改善に比較し男子の改善がやや少なく、1985年の平均寿命には5.70年の男女差が生じた。つまり、1965年から1985年にかけて男女の平均寿命は約0.5年程度拡大した。

以上のように、ライフコースに影響を及ぼす変数のうち結婚変数については、①平均初婚年齢が男女とも上昇したものの、②平均初婚年齢の男女差に顕著な変化はなかった。また、③離婚率は男女とも大きく増加し、一方で、④再婚率は、男子では低下し、女子で上昇したが、その水準は女子より男子の方が相当高い水準にあった。一方、死亡変数については、①男女の平均寿命は、この間7～7.5年の増加をみたこと、②ただし、寿命の男女差は5.18年から5.70年へと0.5年増加したことがみられる。そして、個々の変数の変化は構造的にライフコース類型分布に影響を及ぼしていると考えられる。それらの変数の変化はライフコースタイプの人口分布に対して次のような影響を及ぼすものと考えられる。

すなわち、結婚変数についてみると、平均初婚年齢の上昇は、2つの意味をもち、未婚者状態に留まる期間の延長と生涯を未婚で過ごす生涯未婚者割合の増加傾向を意味する。このことはライフコース類型分布からみると、「未婚・死亡型」ライフコースの人口分布を増加させる潜在的方向性を強めている。なぜなら、未婚者状態に留まる期間の増加は、年齢別死亡率が変化しない条件のもとでは、それだけ未婚のままに死亡する機会を増大させている。また生涯未婚者の増加はそれ自体が未婚死亡者の増加を意味する。

離婚率の増加は、それ自体が完全結婚型（結婚後離婚をせず死別あるいは死亡によって一生を終える人生コース）のライフコース類型分布を減少させる。しかしながら、再婚頻度が非常に高い条件のもとでは、離婚状態から死亡するケースは少ない。したがって、1965～85年間に再婚率が離婚率をうわまわって上昇しているとすれば、「結婚・死亡型」あるいは「結婚・死別型」のライフコースを変化させる要因とはならない。データでみる限り、再婚率の変化が離婚率の変化をうわまわっているとみなすことはできない。したがって、離婚率の上昇傾向は、ライフコースの多様化を促進する要因の一つであると考えられる。

図6 平均寿命の年次推移



資料：厚生省大臣官房統計情報部「簡易生命表」平成元年による。

一方、死亡変数についてみると、平均寿命の増加は、結婚変数が変化しないという条件のもとでは、結婚以前に死亡する人々の数を減少させるため、未婚者のまま死亡するライフコースの人々を減少させる。しかしながら、男女の平均寿命格差の拡大傾向は、「結婚・死別型」と「結婚・死亡型」の人口分布に大きく影響する。すなわち、平均寿命の男女格差の拡大は、女性の「結婚・死別型」人口分布を増加させ、女性の寡婦人口を増大させる。一方、男性の場合は「結婚・死亡型」人口分布を増加させ、死亡の変化は典型的ライフコースへ人々を集中化させる効果をもっている。

しかしながら実際にあらわれるライフコース分布は、上述のような結婚変数にみられるライフコースの多様化圧力と死亡変数にみられるライフコース類型上の集中化傾向が相互に影響して現れる。したがって、個々の変数とライフコース類型分布変化の関係から全体像を明らかにすることはできない。

4. 現代のライフコース類型分布の変化：1965年と1985年の比較

家族人口学 (family demography) における結婚分析の有力な方法として多相生命表モデル (multi-states life table model) がある¹⁰⁾。この方法は人口集団をいくつかの下位人口集団に分け、下位人口集団間の相互移動関係が明確に定義できるとき、この人口集団の発生から消滅の年齢過程をマルコフ連鎖過程として、そのダイナミクスを定量的とらえる方法である。結婚・家族の分析においては、既に述べたように、配偶関係を基軸として、配偶関係状態別の人口集団に分けることができる。そして配偶関係状態間の移動は、初婚、再婚、離別、死別、死亡によってとらえることが可能である。ここでは方法について記述する紙幅がないので説明は省略するが、詳細については脚注文献を参照されたい¹¹⁾。以下、1965年と1985年の結婚の多相生命表から得られたライフコース類型別人口分布に関する主要結果について要約することにした。

1965年のライフコース類型別人口分布は、「未婚・死亡型」のライフコースをたどる人々が男子9.3%、女子7.7%、「結婚・死亡型」が男子64.1%、女子35.8%、「結婚・死別型」が男子25.9%、女子51.5%、そして「結婚・離別型」が男子0.7%、女子5.0%であった。このように、1965年当時においては男子の場合、結婚後配偶者を残したまま本人が死亡して行くライフコースをたどる人々が多かった。このライフコースに分布が集中している。他方、女子をみると、「結婚・死別型」のライフコースに分布が集中している。

一方、1985年のライフコース類型別人口分布についてみると、「未婚・死亡型」ライフコースをたどる人々は、男子18.0%、女子10.1%、「結婚・死亡型」が男子57.8%、女子32.5%、「結婚・死別型」が男子20.5%、女子51.1%、そして「結婚・離別型」が男子

表2 ライフコース類型別人口分布の比較、1965年ならびに1985年 (単位%)

ライフコース 類 型	男 子			女 子		
	1965年	1985年	差	1965年	1985年	差
未婚・死亡型	10.1	18.4	8.3	8.0	10.2	2.2
結婚・死亡型	66.5	59.7	-6.8	25.2	23.1	-2.1
結婚・死別型	22.5	17.7	-4.8	61.8	60.4	-1.4
結婚・離別型	0.9	4.2	3.3	5.0	6.3	1.3

10) 前掲注7)の河野論文およびBongaarts編の文献に結婚の多相生命表の有用性についての指摘がある。

11) 結婚の多相生命表そのものについては、前掲注5)の高橋論文ならびに高橋重郷、「結婚の多相生命表：1980年、1985年」、『人口問題研究』、第45巻第3号、1989年10月、pp.41-55、那須理之助、「試算複式生命表：配偶関係に分類したる」、『厚生指針』、1971年1月、pp.17-27、Schoen, Robert, "Constructing Increment-Decrement Life Tables", *Demography*, Vol.12(2), 1975, pp.313-324, Schoen, Robert, and Kenneth C. Land, "A General Algorithm for Estimating a Markov-Generated Increment-Decrement Life Table with Applications to Marital-Status Patterns", *Journal of the American Statistical Association*, Vol.7(368), 1979, pp.761-776, ならびに Schoen, Robert, *Modeling Multi-group Populations*, N.Y., Plenum Press, 1988. がある。

3.7%、女子6.3%であった。このように、男子では「結婚・死亡型」、女子では「結婚・死別型」がもっとも典型的なライフコースであることに変わりない。しかしながら、1965年から1985年のライフコース類型別人口分布の大きさに変化がみられる。

「未婚・死亡型」ライフコースは、1965～85年で、男子の増加が著しく、8.7ポイントの増加がみられ、女子では2.4ポイント増加がみられた。「結婚・死亡型」ライフコースでは、男子に6.3ポイントの低下がみられ、女子も同様に3.3ポイントの低下がみとめられた。「結婚・死別型」ライフコースは、男子で5.4ポイントの低下があり、女子でも0.4ポイントの低下があった。一方、「結婚・離別型」ライフコースでは、男子の場合3.0ポイントの増加がみられ、また女子においても1.3ポイントの増加がみられた。

以上のように、結婚の多相生命表の結果からみられるように、ライフコース類型別分布は、1965～85年間に大きく変化し、とくに男子で「未婚・死亡型」のライフコースが増加し、男子の典型的ライフコースは減少している。そして、女子の典型的ライフコースである「結婚・死別型」のライフコースにはほとんど変化がみられないものの、「結婚・死亡型」が減少し、他の類型は増加している。

このように、ライフコース類型別分布をみると、1965～85年間に典型的なライフコースに集中する分布の形態からいくつかの多様なライフコース類型へと、人々の人口分布の分散化の傾向がみられる点が指摘できる。

次に検討すべき課題は、1965年から1985年にかけてのライフコース類型分布の変化が、結婚と家族に関する規範的要因の変化と、あるいは寿命の伸長によってもたらされる人口学的要因の変化とどのように関連していたかということである。

5. 死亡および結婚分析モデルによるライフコース変化の要因分析

1965年と1985年の結婚の多相生命表を用いて、それぞれの年次の死亡変数と結婚変数を組み合わせたシミュレーションを行うことによって、1965年から1985年のライフコース別人口分布の変化が死亡変数と結婚変数の変化によってどの程度影響されたかを定量的に分析することが可能である。表3はその計算結果にもとづいて作成した死亡変数と結婚変数がライフコース類型分布に影響を及ぼした効果の分析表である。

「未婚・死亡型」ライフコースの増加についてみると、1965年から1985年にかけて男子の場合8.7%の増加がみられた。そのうち、初婚の発生頻度の低下によって11.3ポイントの増加がみられ、死亡率の低下によって2.7ポイントの低下がみられた。このように結婚変数と死亡変数の異なる作用が相殺するかたちで「未婚・死亡型」ライフコース類型別人口分布の増加がみられたことを示

表3 死亡変数と結婚変数のライフコース類型別人口分布変化に及ぼした効果の分析

性・年次・ 影響変数	ライフコース類型			
	未婚・死亡型	結婚・死亡型	結婚・死別型	結婚・離別型
男子				
1965年	9.3	64.1	25.9	0.7
1985年	18.0	57.8	20.5	3.7
変化	8.7 (100.0)	-6.3 (100.0)	-5.4 (100.0)	3.0 (100.0)
死亡効果	-2.7 (-31.0)	4.1 (-65.1)	-1.4 (25.9)	0.0 (0.0)
結婚効果	11.3 (129.9)	-9.7 (154.0)	-4.4 (81.5)	2.9 (96.6)
複合効果	0.1 (1.1)	-0.7 (11.1)	0.4 (-7.4)	0.1 (33.3)
女子				
1965年	7.7	35.8	51.5	5.0
1985年	10.1	32.5	51.1	6.3
変化	2.4 (100.0)	-3.3 (100.0)	-0.4 (•• ¹⁾)	1.3 (100.0)
死亡効果	-1.9 (-79.2)	-1.3 (39.4)	3.0 (••)	0.2 (15.4)
結婚効果	4.3 (179.2)	-2.0 (60.1)	-3.3 (••)	1.0 (76.9)
複合効果	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	-0.1 (••)	0.1 (7.7)

1) 変化が小さいため、各効果をパーセント表示するには不適切なため「••」で表示した。

している。女子の場合は、男子ほどの変化はみられず1965年から1985年にかけて、このライフコース類型では2.4%の増加をみたが、男子同様に結婚変動が増加の主要因となっており、死亡率低下は逆の作用を示している。死亡率低下は基本的に結婚の機会を増加させるので、「未婚・死亡型」の低下に貢献する働きをもっている。しかし、それ以上に結婚の変化がより大きく作用し、結果的に「未婚・死亡型」を増加させたものといえる。

「結婚・死亡型」ライフコースは、1965～85年の間に男子で6.3%、女子で3.3%減少した。個々の変数、すなわち死亡変数と結婚変数の効果についてみると、死亡率の変化は男子で「結婚・死亡型」を増加させていた。これは、平均寿命の男女差が拡大する場合の影響メカニズムが働いている。一方、結婚変数の変化は結婚の遅れと離婚の増加によって「有配偶人口」を減少させるため、「結婚・死亡型」の減少に大きく貢献した。女子の場合、死亡変数は「結婚・死亡型」を減少させており、男子と女子で効果が異なった。このような男女間の違いは、平均寿命の男女格差が拡大する場合に現れる効果である。結婚変数は「結婚・死亡型」を減少させていたが、しかし、この影響の程度は男子に比較し小さいものであった。

「結婚・死別型」ライフコースについてみると、男女とも死亡変数は「結婚・死別型」と逆の方向性の効果を示した。すなわち、男子で減少効果、女子で増加効果を示した。一方、結婚変数は「結婚・死亡型」を減少させていた。

「結婚・離別型」ライフコースにおいては、死亡変数の効果は男女とも極めて弱いものであった。結婚変数については微弱な増加に貢献した、これは離婚率増加効果があらわれたものといえる。

以上のように、1965～85年の20年間にライフコース類型分布は多様化した。そこには結婚変数と死亡変数が異なる方向性で作用していた。とくに結婚変数の変動効果が死亡効果を上回り、ライフコース類型分布の多様化をもたらしてきたと考えられる。

6. まとめにかえて

家族ライフコース類型分布の時代的变化は、結婚・家族の規範を背景にした初婚・離婚・再婚の年齢分布や頻度の変化と人口学的要因である年齢別死亡率や年齢別死亡率の変化によって起きる。この研究においては、初婚・離婚・再婚の年齢分布や頻度の変化を結婚・家族の規範的变化の行動的側面をあらわす変数として考え、1965年から1985年におけるライフコース類型分布の変化が、規範的要因と人口学的要因との関係で、どのような相互関係にあるのかを検討した。

ライフコースをその型によってみると、わが国のライフコース類型分布は、平均寿命の増加、すなわち死亡率低下によって典型的なライフコースをたどる人々の増加をもたらしてきた。しかしながら、1965年以降においては、「初婚年齢分布」や「離婚年齢分布」の変化、すなわち結婚と家族の規範的变化を背景とする晩婚化現象ならびに離婚率上昇によって、ライフコース類型分布は多様性を強めつつある。そして、その変化は、死亡の変化によってもたらされるライフコース類型の変化の方向性とは異なる傾向がみられた。すなわち、死亡変数の変化に見られる人口学的変化とその特徴であった、ライフコース類型の典型的類型への集中化傾向よりも、結婚変数の変化によってもたらされる効果が強くあらわれており、配偶関係別にみたライフコース類型別人口分布に多様化をもたらしていることが明らかになった。このことは、ライフコースの類型分布上の人口分布に限らず、典型的なライフコースにおける結婚期間（結婚生活の長さ）や寡婦期間（寡婦として過ごす時間の長さ）、未婚期間にも少なからず影響を与え、わが国の人々がたどるライフコースやそれぞれのライフコースにおける特定の状態時間の変容の一端を物語るものといえる。

An Analysis of Life Course Patterns in Japan : Effect of Mortality and Nuptiality Changes between 1965 and 1985

Shigesato TAKAHASHI

The population distribution in the types of marital life course has many social and demographic implications. In this study, we examined the impact on the marital life course patterns associated with mortality and nuptiality changes.

It can be considered various types of life courses for the path of individual life on the process of family formation, growth and dissolution. We have conceptualized four typical life course patterns distinguishing the following life cycle types :

1. NM : peoples who are never married in their whole life.
2. MD : peoples who are married at least once, but they are died before their spouse's death.
3. MW : peoples who are also married at least once, but they are experienced their spouse's death in the later stage of marital life.
4. MV : peoples who are married, but they are eventually divorced.

We have constructed the marital-state life table for the year of 1965 and 1985 based on Japanese data. By using the marital-state life table, we examined the sensitivity of the mortality and nuptiality changes on life course patterns. A few remarks will be made from decompositional calculations :

- (1) Increase of life expectations between 1965 and 1985 contributed to the centralization of population into the MW type in female and MD type in male in the life course patterns.
- (2) In contrast, increase of the first marriage age for male and female between 1965 and 1985 brought about the dispersion of life course patterns.
- (3) Specially in male, it was observed that the proportion of population in NM type of life course increased from 9.3 percent in 1965 to 18.0 percent in 1985.
- (4) The nuptiality effect, involving upward trends in the mean age at first marriage and divorce rate, is larger than the mortality effect on the life course patterns.